

# 太平天国「封建」王朝論 ——皇帝を否定しきれなかった救世主——

菊池秀明

はじめに

民族の復興をとなえて大国化を遂げた中国では、賢明な指導者による権威主義的な統治こそが中国の伝統を踏まえた理想であると考えられている。それは長く列強の侵略に苦しんだ中国人の自尊心をくすぐり、多くの支持を集めているという。だがそれが本当に中国の歩むべき唯一の道なのだろうか。

そこで歴史をひもといてみると、160年余り前の中国では皇帝の称号を否定し、複数の王からなる政権をうち立てようとした事件があった。太平天国である。その指導者洪秀全はキリスト教が太古の中国で信仰されていた宗教であると考え、秦の始皇帝以来の歴代皇帝が上帝ヤハウエを冒瀆してきたと批判した。そしていにしへの中国に立ち戻るべく、満州人王朝である清朝の打倒を唱えて蜂起した。

本稿は太平天国の王権と社会がもつ特質について考察を進める。太平天国の王権がもつ複雑な性質については、羅爾綱氏が太平天国軍師負責制を提起した。それによると天王洪秀全は「臨朝不理政」であり、軍師であった東王楊秀清が「国務を総理」した。羅氏はこれが「皆下より擬定」して諸王の決定を仰ぐボトムアップな制度であり、王権を厳しく制限した点で「民主集中」制的な性質を帯びていたと述べている<sup>1)</sup>。

それでは太平天国の王権のあり方は、社会にいかなる特質を付与したのだろうか。本稿は太平天国が上帝ヤハウエのもとでの「天下一家」を主張する宗教観と太古の中国で行われた封建制度をベースとした「分権」的な統治体制をめざしたと考えたい。それは太平天国が専制君主による集権的支配をどこまで否定したかを検証する作業になろう。

## 1. 洪秀全のキリスト教受容と「皇帝」の称号否定

洪秀全は広東生まれの客家人であった。彼は科挙を受験したが成功せず、病に倒れて天上に昇る夢を見た。そこで彼は金髪に黒服姿の老人から腐敗したこの世を救えという使命を与えられた<sup>2)</sup>。

1843年にプロテスタントの伝道パンフレット『勸世良言』を読んだ洪秀全は、夢で自分が出会った老人こそはキリスト教の神ヤハウエであると確信した。また宣教師たちがヤハウエの訳語として、中国の古典にある「上帝」という語をあてていたため、洪秀全はヤハウエが太古の中国で信仰されていた神であると受けとめた<sup>3)</sup>。このようにヨーロッパ文化の受容

にあたり、中国の歴史の中にその原型となるものを探し出し、中国「起源」であるが故に価値があると見なす傾向は、近代中国の歴史において繰り返し見られた。

上帝教を創設し、布教活動を始めた洪秀全であったが、アヘン戦争で外国に対する反発の強かった広東では成果はあがらなかった。そこで彼とその同志は広西へ向かい、同じく貧しい暮らしをしていた客家の間に布教した。洪秀全らは旧約聖書にあるモーセの十戒になり、それまでの中国の宗教を偶像崇拜と批判してその神像を壊してまわった<sup>4)</sup>。また唯一の神である上帝を信仰する者は救われるが、拝まない者は虎や蛇に襲われると宣伝した<sup>5)</sup>。この教えは既存の神々による庇護を得られず、山奥で不安定な生活をしていた下層民の心を捉え、信者の数は爆発的に増えた。

だが偶像破壊運動は廟の祭りを主催していた有力者の怒りを買って、活動家が捕らえられた。信者に動揺が広がると、楊秀清というシャーマンに天父ヤハウエが降臨し、天上に昇って使命を受けた洪秀全は「天下万国の真主」<sup>6)</sup>であるというお告げを下した。これを受けた洪秀全は、太古の中国は上帝ヤハウエを崇拝していたが、始皇帝が皇帝を名乗ってヤハウエを冒瀆して以後、中国人の上帝に対する信仰は失われた。中国の歴代皇帝はみな「地獄の災いを求める者」<sup>7)</sup>であり、現在の清朝皇帝を打倒して、上帝を崇拝していた中国に立ち返らなければならないと主張した。そして信徒たちは極秘で武装蜂起の準備を進めた。

1850年に広西の金田村で蜂起した洪秀全たちは太平天国を名乗り、北へ向かって進撃を始めた。1853年に長江中流域の武昌を占領した太平軍は、一気に長江を下って南京を攻めた。清朝の守備隊はあっけなく敗北し、旗人と呼ばれる満州人、モンゴル人を中心とする将兵とその家族2万人が偶像崇拜者と見なされて殺された<sup>8)</sup>。南京に首都を構えた太平天国は北京攻略軍を派遣したが、後続の軍との合流がうまくいかずに敗退した。また食糧の安定的供給を図るために長江中流域に占領地を広げた<sup>9)</sup>。

## 2. 太平天国の「宗族」共産主義と「封建」国家論

太平天国は蜂起にあたり、集まった信者で「男營」「女營」と呼ばれる男女別々の軍事組織に作り、食糧を集中的に管理する「聖庫」<sup>10)</sup>制度を設けた。これは武昌、南京などの大都市を占領した後にも行われ、人々は財産を没収され、家族と引き離されて25人を1組とする「館」に編入された<sup>11)</sup>。食糧も館ごとに支給され、成年男子の場合は1日あたり米1斤から1.5斤（後に食糧不足により減少した）が与えられた<sup>12)</sup>。また織物作りなど様々な技能を持つ者を集めた「匠營」や生活必需品を作る「百工衛」などが設けられた<sup>13)</sup>。

こうした社会組織は上帝教の「およそ天下はみな天父上主皇上帝の一大家族である」という教義によって支えられていた。太平天国の発布した政策綱領である『天朝田畝制度』は「飯があればみんなで食い、服があればみんなで着る」「どこの人もみな均等にし、一人残らず暖衣飽食できるようにする」<sup>14)</sup>という共産制の理想を掲げた。その思想的なよりどころは中国で長く理想の社会とされた大同ユートピアであったが、より直接的なベースは漢族の移

民が相互扶助を目的として作った宗族と呼ばれる同族団体であったと考えられる。

この宗族は始遷祖と呼ばれる共通の祖先に連なる人々によって構成され、メンバーシップを持つ人々の関係は原則として平等だった。また一族の共有財産が置かれ、祖先祭祀や科挙を受験する成員に対する経済的支援を行った。動乱の時代や治安の悪い地域ほど人々は宗族に庇護を求め、福建の客家居住区では円楼と呼ばれる要塞型住宅が作られた<sup>15)</sup>。太平天国に参加した人々は宗族を形成できない下層移民の出身だったが、それだけに自分の生存を保障してくれる擬似「宗族」としての上帝会を頼ったのである。つまり南京に出現した共産主義的な軍事、社会組織は上帝ヤハウエの庇護を約束された人々の巨大な宗族だった。

ところで太平天国の社会組織が宗族をベースとしたことは、これに君臨する権力のあり方に影響を与えた。先に見たように洪秀全は皇帝の呼称を上帝ヤハウエに対する冒瀆と見なし、みずからは天王を名乗った。また彼以外にも東西南北の方角を名乗る四人の王と、これを補佐する翼王が封じられた。これら五人の王はヤハウエを天下万国の人々の共通の父とし、洪秀全をその嫡男とする上帝教の教義では天王を補佐する臣下であった。だが同時に上帝教はヤハウエを父、イエスキリストを長男、洪秀全を次男とする特異な家族観を持っており、そこでは五人の王も「我々兄弟五人は天と主の恩を受けて王に封じられ、天父の命を受けて下凡し、真主を助けた」<sup>16)</sup>とあるように上帝の子供、洪秀全の弟と位置づけられた。

元々中国では皇帝が唯一の専制君主であるのに対して、春秋、戦国以前から存在した王は複数の者が並び立ちうる封建制度の君主であった。また一子相続が一般的だった江戸期日本の親族組織と比べ、徹底した均分相続が行われた中国の宗族では兄弟間の関係も対等だった<sup>17)</sup>。太平天国はヤハウエの権威を強調して皇帝の称号を否定した結果、天王を初めとする六人の王の差異も絶対的なものではなくなったのである。じじつ太平天国が蜂起すると、書生気質で教義の研究に没頭しがちだった洪秀全に代わり、軍師の地位について東王楊秀清が軍事と政治を取り仕切った。

また中国では長く皇帝が官僚を用いる中央集権的な統治が続いたが、画一的な支配体制は深刻な弊害を生んでいた。16世紀頃から科挙合格のタイトルをもつ地方のエリートが「地方のことは地方の人の手で」を唱えて一種の自治を求め、人口の増加に対応しきれなくなった地方政府を補佐して行政サービスを担い始めた<sup>18)</sup>。複数の王による一種の「分権」体制を採った太平天国はこうした社会の変化と親和性を持ち、彼らが人材登用のために行った科挙は諸王がそれぞれ別個に試験を主催した<sup>19)</sup>。

さらに興味深いのは太平天国が長江中流域の占領地で実施した郷官制度である。郷官とは中国の古典にある地元出身の地方官で、納税や徴兵、裁判などを担当した。1万2,000戸余りを統括する軍帥以下の各官は地方から選出され、末端にあたる両司馬（25戸を統轄）、伍長（5戸を統轄）は村人が宗族会議を開いて担当者を決めた<sup>20)</sup>。もっとも上級の地方官は中央から派遣されたため、太平天国の郷官制度は中国で長く行われてきた郡県制との折衷と呼ぶべきものであった。また郷官は太平軍の作戦活動に伴う様々な負担を担ったため、清朝の

処罰を恐れた従来の有力者は郷官になりたがらなかった。だが清朝統治下では活躍の場がなかった新興の地域リーダーは、郷官となることで地方行政に参与する道を手に入れた。中には「死の危険を冒して賊中に入りました」<sup>21)</sup>とあるように、地域の利害を代弁して太平天国の地方政府と交渉した者もいたという。

このように見ると太平天国の登場は、皇帝と官僚機構による専制的な統治体制を揺り動かすものであったと言えるだろう。むしろ清末に盛んとなった郡県・封建論争<sup>22)</sup>が、地方に一定の自立性を認める封建論と皇帝権力の関係をどのように考えるべきか答えを見つけられなかったように、太平天国も「分権」的な王制や郷官制度を明確に理論づけることは出来なかった。だが少なくとも皇帝の称号を否定したことは、太平天国に「封土なき封建制」と呼ぶべき体制を生み出したのである。それは大名が割拠する封建制が長く続き、中央集権的な国家体制作りが急務だった幕末維新期の日本と比べた時に、当時の中国社会の直面していた課題が異なっていたことを示している。

### 3. 救世主信仰とシャーマニズムが破壊した「封建」国家

ところで洪秀全は天王という称号以外に、「天下万国の真主」という称号を持っていた。真主とは世界の終末が訪れた時、ミロク仏の生まれ変わりがこの世を救うという救世主で、白蓮教などの民間宗教で広く信じられていた<sup>23)</sup>。シャーマンだった楊秀清は、天上に昇って使命を受けた洪秀全こそは真主であると宣言し、それが武装蜂起につながった。南京到達後、主として宗教的な権威として宮殿にこもった洪秀全と楊秀清の間には一種の分業体制がしかれたが、それは洪秀全を唯一の救世主とみなす真主信仰とは論理的に矛盾していた。

この真主信仰の問題点が最初に表面化したのは外交においてだった。太平天国が南京を占領すると、イギリスなどのヨーロッパ諸国はその実態を探るべく使節を派遣した。これと接見した王の一人はイギリス人がモーセの十戒を誦めると、「我々のものと同じだ！」と驚き喜んだ。だがイギリス人が洪秀全について尋ねると、その王は「真主」の文字を書き記し、中国の主は全世界の主であり、世界の人々は上帝の次男である彼に従わなければならないと言った。さらにイギリス人に対して王はこう言った。

真主は単なる中国の王ではない。彼は我々の主であると共に、君たちの主でもあるのだ<sup>24)</sup>。

ここでは真主である洪秀全は世界の救世主であり、中国で唯一の君主であるだけでなく、全世界でも唯一の君主であるとの考えが表明されている。この言葉に唖然としたイギリス人は太平天国が伝統的な華夷思想から抜け出しておらず、主権国家の概念を理解していないと判断して、正式な会談を行わずに南京を去った。続けて南京を訪れたフランス、アメリカも交渉を進めることが出来ず、アメリカ公使は太平天国政府と対等な立場で交渉することは不

可能であると断言した<sup>25)</sup>。

次に問題となったのは東王楊秀清が行う天父下凡と呼ばれるシャーマニズムだった。楊秀清は広西山奥の客家の出身で、若くして両親を失い、炭焼きをしながら社会の底辺で暮らしていた。天父ヤハウエの降臨が始まると、「目が見えず、口がきけなくなる」<sup>26)</sup> 異常な病気を抱えていた彼は人々の罪を贖う「聖霊」あるいは「勸慰師」と位置づけられ、ヤハウエを父とする天上の家族においても洪秀全に次ぐ地位を与えられた。

通常、憑依型のシャーマンは女性など社会的劣位にある人々になるケースが多く、神々が降臨している間は人々の尊敬を集めるが、トランス状態から醒めた後は聖なる存在とは見なされない<sup>27)</sup>。だが文盲ながら才気のあった楊秀清は軍師となり、軍事、政治をほぼ取りしきった。南京到達後も布告の多くは彼の名によって発布された。

だが楊秀清の天父下凡は大きな矛盾を抱えていた。日頃彼は洪秀全を「二兄」と呼び、東王の立場からは天王の臣下としてふるまった。だが一度彼に天父ヤハウエが降臨すると、二人の関係は逆転する。父であるヤハウエの命令は絶対であり、息子である洪秀全は逆らうことができない。これは太平天国を一つの擬制「宗族」として捉えた場合、洪秀全の弟と父親という二つの顔を使い分ける楊秀清の行動は世代ランクの紊乱に他ならなかった。

南京到達後、洪秀全と楊秀清のあいだには齟齬が目立つようになり、下凡した天父がささいなことを理由に洪秀全を叱責し、彼を笞打つ事件が発生した<sup>28)</sup>。また楊秀清以外の王たちは彼の作戦計画に従って各地を奔走したが、しだいに彼の独裁に対する不満が高まった。すると不安になった楊秀清は命令に背いた幹部を処刑したり、田家鎮の戦いで敗北した燕王秦日綱の王位を剥奪して「三年間奴隷とする」<sup>29)</sup> 処罰を行った。封建的な王制では王同士の関係も原則対等だったが、楊秀清が世代ランクを飛び越して「父」としてふるまった結果、「兄弟」である笞の王たちとの対立が深まった。この経緯は「東王は威逼が余りに過ぎたため、この三人（韋昌輝、石達開、秦日綱）は心に怒りを積み、口は従っても心は収まらなかった。少しの怒りが積み重なり、集まって患害をなした」<sup>30)</sup> と記されている。

1856年、楊秀清は各地に展開していた軍を南京付近へ集結させ、城を包囲していた清軍を一掃した。だが彼は間髪をいれず他の王たちに出征を命じ、南京には洪秀全と楊秀清が残るのみとなった。すると天父ヤハウエが下凡し、洪秀全を楊秀清の王府へ呼びつけた。天父は洪秀全に対して、「おまえと東王は均しく我が子だ。東王にはかくも大きな功績があるのに、どうして九千歳の地位に止めておくのか」と詰問した。この時洪秀全は「東王は万歳です。その子もまた万歳です」<sup>31)</sup> と答え、昔から中国では皇帝のみに与えられ、太平天国でも天王だけが名乗っていた万歳の称号を楊秀清に与えると約束した。記録によると、さらに下凡した天父は次のようなお告げを下したという。

朝廷内の諸臣は努力が足りぬ。心を一つにして帝たる真の神を敬っていない<sup>32)</sup>。

一見臣下たちを戒めたかに見えるこのお告げには、その実重大な問題が含まれていた。「帝」とはヤハウエ即ち楊秀清であるが、彼は同時に「真の神」であるという。天王洪秀全は地上の権力者としては王の一人に過ぎないが、真主であることで他の王たちと区別されていた。だがいま楊秀清が「真の神」となったことで、救世主としての洪秀全の立場まで相対化されてしまったのである。

楊秀清に万歳の称号を与えることに同意した洪秀全であったが、宗教的な権威である真主の地位を侵犯されることは決して容認できなかった。はたして洪秀全は前線に出ていた王たちに密命を下し、楊秀清の殺害を命じた。これを受けて南京へ戻った王たちは9月に天京事変を引き起こし、楊秀清とその部下、家族など数万人を殺した。シャーマニズムは楊秀清による世代ランクの飛び越しによって王たちの間に亀裂を生み、救世主としての宗教的権威を侵された洪秀全を逆上させた。いわば救世主信仰とシャーマニズムは、ヤハウエのもとの「封建」国家として出発した太平天国に内部分裂をもたらしたのである。

#### 4. 王たちの自立傾向と天父天兄天王太平天国

天京事変は太平天国にとって大きな打撃となった。楊秀清の死によって求心力が失われ、長江の上流から攻勢をかけた曾国藩の湘軍に拠点次々と奪われた。人々は拳兵以来の五王の中で唯一残った翼王石達開に望みを託したが、親族以外の人間が権力を握ることを恐れた洪秀全は無能な兄を王に封じて様々な圧力を加えた。これに耐えかねた石達開は1857年に兵を率いて南京を去り、事実上太平天国から離脱した。

この時洪秀全は若く有能な前線指揮官たちを抜擢して指導部を立て直そうとした。広西藤県の山郷出身だった李秀成はその一人で、同郷の陳玉成と共に安徽で湘軍を撃破し、劣勢を巻き返した。1860年に彼らは電撃的な作戦で南京周辺の清軍を再び一掃し、太平天国は一時的に危機を脱出した。

だがここで再び王権のあり方をめぐる問題が発生した。1859年に洪秀全のいところで初期の信者だった洪仁玕が香港から南京へ到着すると、喜んだ洪秀全は彼を干王に封じ、かつて楊秀清が担っていた軍師の地位を彼に与えた。だが古参の將軍たちは功績もない洪仁玕が王位を得たことに不満だった。そこで洪秀全はバランスを取るために陳玉成を英王、李秀成を忠王に封じた<sup>33)</sup>。諸王による「封建」体制の復活である。

次に問題となったのは王たちの地方勢力化の傾向だった。「宗族」共産制が行われた南京では、人々はある王の王府に所属し、そこから様々な物資の供給を受けて生活していた。物資は公有が原則であったが、その分配は「制限が多く、名は公であったが実は公平ではなかった」。このため「群賊は物資を南京へ運ぶ時に、船が埠頭につくと、往々にして秘かに自分の館に運び込んだ」<sup>34)</sup>とあるように、それぞれの王府は占領地で集めた物資が南京に到着すると、秘かに自分の手中に収めて管理あるいは分配した。元々中国の宗族は内部に「房」と呼ばれる分節を持っており、一定の共有財産を除くと、それぞれの「房」が競争しながら

資産の拡大に努めた<sup>35)</sup>。同じことは太平天国の諸王府についても当てはまり、大きな権限を握るか、広大な占領地を手に入れた王府はそれだけ豊かになり、庇護を求める人々が集まった<sup>36)</sup>。

太平天国の諸王に対する人々の評価は、「飯があれば皆で食う」という理想をどれだけ実現できるかで左右された。このため「天王はあらゆる首領、王と将兵にそれぞれ決められた食物、銭と衣服を支給する。彼はこの家庭の父親だからだ。もちろん外地で闘っている各王と将軍たちは決して単純に支給された額に依存している訳ではない」<sup>37)</sup>とあるように、王たちは中央政府から食糧や物資の支給を受ける一方で、自らも支配地の拡大に熱をあげた。また「現在は 11 人の王がいるが、人々はみな諸王の中のいずれか一人のもとに所属している。誰もが定期的に彼の王が管轄する公共機関に名前を登記し、そこから毎日の配給食品を受け取っている」<sup>38)</sup>とあるように、獲得した物資は南京にいる部下とその親族に分け与えられた。なかには幾つもの王府から貢ぎ物を求める使者がくり返しやって来て、負担に苦しんだ住民の反発を招いた地域もあった<sup>39)</sup>。

こうした中で、最も成功したのは忠王李秀成であった。彼は南京付近の清軍を殲滅すると、中国で最も豊かな地方である江蘇東部、浙江へと軍を進めた。上海から遠くない蘇州に王府を構えた李秀成は、各地に郷官を置いて地域支配を始めた。ここで集められた物資は南京へ送られ、忠王の部下とその家族の生活を支えた。当時南京を訪問したヨーロッパ人の記録によれば、「忠王は恐らく天王よりも豊か」<sup>40)</sup>であり、忠王府には蘇州で手に入れた大量の衣服が貯蔵されていたという<sup>41)</sup>。

これら諸王の地方における勢力拡大に頭を痛めた洪秀全ら太平天国の中央政府は、1861年に国号を太平天国から天父天兄天王太平天国に改めた。その目的は洪秀全の権力を強化することにあり、軍を「天軍」、兵士を「天兵」、支配下の民を「天民」と呼ぶように命じ、「わが隊、わが兵」と呼ぶ者を反逆者として処刑した。だが王たちはこれに反発し、新しい国号を用いない者もいた<sup>42)</sup>。

次に洪秀全らが行った諸王の勢力削減策は、強大化した王の部下を新たに王に封じ、その権限を分散させることだった。李秀成の部下だった陳坤書はその一例で、彼は護王に封じられると李秀成の命令に従わなくなった<sup>43)</sup>。この頃湘軍は南京を包囲し、南京の食糧事情が逼迫した。南京の中央政府は慌てて使者を派遣して食糧を集めようとしたが、各地で自立傾向を強めた王たちは城門を閉ざし、要請に応じなかった<sup>44)</sup>。賄賂で王位を得ようとする者も現れ、士気を鼓舞する目的で王位を濫発した結果、太平天国全体で 2,700 人の王が生まれた。その結果命令系統が混乱し、統一的な作戦活動は殆ど不可能になった。

戦局が絶望的になった 1863 年、李秀成は洪秀全に南京を放棄して、外地にいる友軍と合流することを求めた。だが洪秀全は「朕は上帝と天兄の命を受けてこの世に降り、天下万国の唯一の真主となった……。朕の天下は鉄壁だ！」<sup>45)</sup>と言ってこれを拒絶した。翌 64 年 5 月に彼は病に倒れると、「朕はこれから天国に上り、天父天兄から天兵を得て、天京を守る」<sup>46)</sup>

との詔を残して病死した。7月に南京は陥落し、太平天国は滅亡した。

#### おわりに

洪秀全は皇帝の称号をヤハウエに対する冒瀆として廃止し、みずからは天王を名乗って複数の王による「封建」王朝を建てた。南京で実行された共産主義的な社会、軍事制度は全ての人間を上帝の一大家族とする擬似宗族と言うべきもので、王たちの関係も兄弟関係になぞらえられた。当時の中国社会は皇帝と官僚機構による専制統治の弊害が大きく、地方のエリートたちは「分権」を求めている。太平天国の郷官制度はこうした潮流に適合し、軍師だった楊秀清を中心とする諸王の統治は「封土なき封建制」としての側面を持っていた。

だが一方で洪秀全は全世界を救済する唯一の救世主を自任していた。また楊秀清の天父下凡は父である上帝ヤハウエを降臨させる点で世代ランクの紊乱であり、他の王たちの不満が高まった。これに不安を抱いた楊秀清は世俗的に洪秀全と同じ地位を要求し、さらに洪秀全の宗教的権威を侵犯した。これに逆上した洪秀全は天京事変を引き起こし、諸王による「封建」統治は破産した。

その後洪仁玕が南京へ到着したことをきっかけに、陳玉成、李秀成が王に封じられて諸王による「封建」体制が復活した。だが中国の宗族は分節間の競争原理を抱えており、太平天国の諸王も配下の人々を保護するために支配地の拡大と富の集積に熱を上げた。洪秀全らの中央政府はこれを規制しようとしたが、諸王の反発を招いて戦局はかえって悪化した。

結局洪秀全は宗教的信念から皇帝を否定しながら、専制君主の誘惑からは逃れることが出来なかった。太平天国は諸王による「分権」的な封建王朝を構想したが、洪秀全は最後まで救世主の地位にしがみついた。近代中国の課題であった皇帝によるトップダウンの支配体制からの脱却は先送りされ、日本を含む列強の侵略の前に地方「分権」や「自治」を求める連邦制の試みは分裂主義と見なされた。その後遺症は現在なお中国国内および周辺地域に対して強圧的な態度で臨んでいる北京の共産党政府まで続いている。

#### 註

- 1) 羅爾綱『太平天国史』巻26、政体、中華書局、1997年、889頁。
- 2) Theodore Hamberg, *The Visions of Hung Siutshuen and Origin of the Kwangsi Insurrection*, Hongkong, 1854, pp. 10 (青木富太郎訳『洪秀全の幻想』生活社、1940年、並木頼壽等編『新編 原典中国 近現代思想史』1、開国と社会変容、岩波書店、2010年、147頁)。
- 3) 菊池秀明『太平天国にみる異文化受容』山川出版社、2003年。
- 4) Theodore Hamberg, *The Visions of Hung Siutshuen and Origin of the Kwangsi Insurrection*, Hongkong, 1854, pp. 36-40.
- 5) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補本、中国社会科学出版社、1995年、101頁。
- 6) 『天情道理書』(中国近代史資料叢刊『太平天国』1、神州国光社、1952年、365-366頁)。
- 7) 『原道覚世訓』『太平天国』1、96-97頁。

- 8) 菊池秀明『金田から南京へ—太平天国初期史研究』汲古書院、2012年。
- 9) 菊池秀明『北伐と西征—太平天国前期史研究』汲古書院、2017年。
- 10) 五大紀律詔、命兵將殺妖取城所得財物盡繳歸天朝聖庫詔（太平天国歴史博物館編『太平天国文書彙編』中華書局、1979年、31頁、33頁）。滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、613頁）。
- 11) 陳子炯『武昌紀事』（『太平天国』4、596頁）。張汝南『金陵省難紀略』（同書695頁）。
- 12) 『金陵癸甲紀事略』（『太平天国』4、656頁）。張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧（『太平天国』3、277頁）。
- 13) 張德堅『賊情彙纂』卷4、偽軍制上、附諸匠營（『太平天国』3、139頁）。滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、615-617頁）。
- 14) 『天朝田畝制度』（『太平天国』1、321-322頁）。
- 15) M. Freedman 著、田村克巳等訳『中国の宗族と社会』弘文堂、1995年。David Faure, *Emperor and Ancestor: State and Lineage in South China*, Stanford: Stanford University Press, 2007.
- 16) 『太平救世歌』（『太平天国』1、241-242頁）。王慶成「太平天国上帝的大家庭和小家庭」『太平天国的歴史と思想』中華書局、1985年、391頁。
- 17) 菊池秀明「日中の政治、社会構造の比較」（北岡伸一、歩平編『日中共同歴史研究報告書』1、古代・中近世史編、勉誠出版、2014年、505-544頁）。
- 18) 黄東蘭『近代中国の地方自治と明治日本』汲古書院、2005年。溝口雄三等『中国思想史』東京大学出版会、2007年。
- 19) 羅爾綱『太平天国史』卷33、科挙、1285頁。また張德堅『賊情彙纂』卷3、偽官制、偽科目（『太平天国』3、111頁）。
- 20) 張德堅『賊情彙纂』卷3、偽官制、偽科目（『太平天国』3、111頁）。林宏溪堂立司馬伍長立單（『太平天国文書彙編』424頁）。
- 21) 蘇吉治『流離記』（徐川一『太平天国安徽省史稿』安徽人民出版社、1991年、94頁より引用）。また本史料を参照したと見られる民国『石埭備志彙編』卷1、大事記稿も郷官となった人々が「出死入生、奔走省府、地方頼以稍安」であったと述べている。
- 22) 張翔・岡田英弘共編『「封建」・「郡県」再考—東アジア社会体制論の深層』思文閣出版、2006年。
- 23) 小島晋治「十八世紀末～十九世紀中葉の民間宗教、民衆運動の思想」『太平天国運動と現代中国』研文出版、1993年、145頁。
- 24) A. Report by T T Meadows, Bpp, 1852-3, C, 1667, pp. 26-30, Enc. in Bonham to Clarendon, 11 May 1853 (Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, Honolulu: The University Press of Hawaii, 1982, pp. 50).
- 25) A Report by Robert M Mclane, US Minister to China, US Congressional Papers, 35<sup>th</sup> Congress, 2nd Session, Senate Executive Document 22, vol. VIII, pp. 50-5 (Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, pp. 131).
- 26) 『天情道理書』（『太平天国』1、366頁）。
- 27) 劉枝萬「台湾のシャーマニズム」（桜井徳太郎編『シャーマニズムの世界』春秋社、1978年、80頁）。鈴木満男「台湾漢人社会と tangki の構造的関連」（桜井徳太郎等編『シャーマニズムとは何か—国際シンポジウム・南方シャーマニズム』春秋社、1983年、72頁）。
- 28) 『天父下凡詔書』（『太平天国』1、23頁）。
- 29) 『天父聖旨』卷3、乙榮五年二月十三日（中国近代史資料叢刊続編『太平天国』2、広西師範大学出版社、2002年、331頁）。また天父下凡によって直接死罪を命じられた例として陳宗揚夫妻と

曾水源がある。

- 30) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補本、138頁。
- 31) 張汝南『金陵省難紀略』（『太平天国』4、703頁）。
- 32) 『天父聖旨』巻3、丙辰六年七月初九日早（中国近代史資料叢刊続編『太平天国』2、345頁）。  
「真神」は『天理要論』にも「上帝独一真神」（『太平天国』1、337頁）といった表現があり、これが初出ではないが、この日のお告げは秦日綱、陳承瑑の「幫妖」の罪を断じる文脈で語られている。また天父は東王府へ至った洪秀全に対して語っている点からみて、単に上帝への崇拝を求めたというよりも、楊秀清の宗教的權威を高める目的を持っていたと考えられる。
- 33) 洪仁玕が干王に封じられたのは1859年5月で、その上諭には「朕意玕胞、達胞、玉胞知之」とあり、陳玉成が英王に封じられたのはほぼ同じ時期と考えられる。また李秀成が忠王に封じられたのは二人よりもやや遅く、1859年10月頃であるという（羅爾綱『太平天国史』巻55、洪仁玕、1977頁、同書巻56、陳玉成、2001頁、同書巻57、李秀成、2027頁）。
- 34) 滌浮道人『金陵雜記』（『太平天国』4、636-637頁）。
- 35) M. Freedman 著、田村克巳等訳『中国の宗族と社会』第4章。
- 36) この点でまず人々の支持を集めたのは楊秀清であり、東王府には戦死した将兵の妻、親戚や友人が仕事を求めて集まった（A Narrative by 'two Europeans who for several months have been living at Nanking', *Overland Friend of China*, 15, 21 and 30 January 1858, Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, pp. 187）。天京事変で韋昌輝、秦日綱とその部下は東王関係者に対する虐殺を行うが、それがエスカレートした原因は東王府とそれ以外の王府とで待遇に格差が存在したためと考えられる。
- 37) A Pamphlet by Rev. Griffith John, *The Chinese Rebellion*, Canton, 1861 (Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, pp. 267).
- 38) An Account by Lt Col.G J Wolseley, G J Wolseley, *Narrative of the War with China in 1860*, London, 1862, ch. XIV (Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, pp. 331).
- 39) 張德堅『賊情彙纂』巻10、賊糧、貢獻（『太平天国』3、270頁）。また菊池秀明『北伐と西征』第7章、342頁。
- 40) A Pamphlet by Rev. Griffith John (Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, pp. 267).
- 41) An Account by Lt Col.G J Wolseley (Prescott Clarke and JS Gregory, *Western Reports on the Taiping: A selection of documents*, pp. 331).
- 42) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補本、351頁。なお羅爾綱氏の考証によると、1862年には陳玉成、李秀成共に「天父天兄天王太平天国」の国号を用いておらず、侍王李世賢は1864年に至っても使わなかったという。
- 43) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補本、306頁。
- 44) 洪仁玕親書簽駁李秀成供、続編『太平天国』2、419頁。それによると李秀成は蘇州、杭州、常州、嘉興、李世賢は句容、溧陽など、輔王楊輔清は安徽の寧国、池州など、章王林紹璋は蕪湖などを自身の勢力範囲として「拓兵自固」し、中央政府の食糧供出の催促に応じなかったという。
- 45) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補本、339-340頁。
- 46) 沈懋良『江南春夢庵筆記』（『太平天国』4、445頁）。